



# 妊娠・出産経験が成人期の生と死に対する態度に及ぼす影響

田中, 美帆

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2017-03-25

(Date of Publication)

2025-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6810号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006810>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

## 論文内容の要旨

氏名 田中 美帆  
専攻 人間発達専攻  
指導教員氏名 齊藤 誠一

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

妊娠・出産経験が成人期の生と死に対する態度に及ぼす影響

### 論文要旨

本論文では、妊娠・出産の経験が成人期の生と死に対する態度に及ぼす影響について検討を行った。

第I部では、本論文の目的のため死生観についての先行研究を整理し、妊娠・出産の心理学的意味について心理学と関連領域の先行研究を概観した。第1章では、死生観を扱った先行研究の問題点および偏りを指摘した。また、妊娠、出産、育児の経験により最も生への志向が高まると考えられる成人期の死生観について十分に考慮されてこなかったことが、先行研究において生の側面がこれまで扱われなかった一因であることを示した。そのうえで、第2章では、妊娠、出産に伴う心理的变化を扱った先行研究について整理した。妊娠期の心理変化は女性の生涯発達においても、その後の育児においても重要な意味を持つことを指摘した。また、体内に自身の命だけでなく、胎児の命も有し、胎児や生まれてきた子どもの養育の責任を負うだけでなく、その生死についての決定権をも有する時期であるという妊娠、出産の持つ特異性について述べた。第3章では、本論文の目的と構成を明らかにした。また、成人期における生と死に対する態度の変容とその影響要因を妊娠、出産、育児の観点から捉える意義について示した。

第4章(研究1)では、成人期の生と死に対する態度を測定するため、生や死、命に対する評価や感情、考え方を生と死に対する態度とし、成人期男女355名を対象に、生と死に対する態度尺度を構成し、その妥当性と信頼性について検討した。その結果、「死への不安・恐怖」、「人生の目標」、「死後の世界への信念」、「生と死のつながり」、「生への執着」の5因子が抽出された。また、内的整合性、構成概念妥当性の観点からも概ね満足できる信頼性と妥当性を備えていることが確認された。

第5章(研究2)では、研究1で構成された尺度を用いて、成人期および中年期の男女420名を対象に、探索的に成人期および中年期の生と死に対する態度の様相や個人的背景要因の違いが与える影響を検討した。その結果、「生への執着」については、婚姻状況、子どもの有無の違いによる影響のみが認められた。したがって、成人期の生と死に対する態度に影響を与える要因は様々だが、そのうち、婚姻状況の違いや子どもの有無が与える影響は、その他の個人的背景要因の違いが与える影響とは異なることが明らかにされた。この結果から、成人期の生と死に対する態度に生への志向に関する個人的背景要因が独特の影響を与えている可能性が示唆

された。

第6章(研究3)では、個人的背景要因が育児期の生と死に対する態度に与える影響の強さについて明らかにするため、育児期男女286名を対象に信仰、事故遭遇経験、入院経験、死別経験に加え、子どもの数および出産経験という個人的背景要因を取り上げ検討した。その結果、育児期の生と死に対する態度に影響を及ぼす要因には性差があったが、女性では死別経験や入院経験等の先行研究で検討されてきた個人的背景要因よりも出産経験や子どもの数といった子どもに関する要因が影響を与えていること、男性においても子どもの数が多いほど、「生への執着」が高まることが明らかになった。この結果から、育児期の生と死に対する態度において生きることへの志向に関する個人的背景要因が強い影響を及ぼすことを示した。

第7章(研究4)では、生と死に対する態度の変化の自覚やその具体的な契機を明らかにするため、結婚、妊娠、出産を経験した育児期女性10名を対象に生と死に対する態度の変化やその契機について質的に検討した。その結果、育児期女性は妊娠、出産経験を生と死に対する態度を変化させる経験であると自覚しており、妊娠、出産および子どもの存在によって命の有限性を意識し、自己の死を回避することを望むことが明らかになった。この結果から、育児期の生と死に対する態度変容の契機として、妊娠、出産が重要な経験であることを示した。

第8章(研究5)では、妊娠、出産、育児経験の違いが生と死に対する態度に与える影響を明らかにすることを目的に、前妊娠期、妊娠期、育児期の361名を対象に生と死に対する態度を比較検討した。その結果、妊娠期の生と死に対する態度は前妊娠期および育児期とはその様相が異なり、とりわけ、「死への不安・恐怖」が低下し、「生への執着」が上昇することが明らかになった。妊娠期に一時的に「死への不安・恐怖」が低下し、「生への執着」が高まるという結果について、これまで経験的に語られてきた「子どものためなら死ぬる」、「私が死んだらこの子が困る」という発言や養育者が直面する子どもの命を守るという究極的な責任と関連させながら議論を行った。

第9章(研究6)では、妊娠各期の生と死に対する態度の特徴を明らかにすることを目的として妊娠初期、中期、後期にある女性126名を対象に生と死に対する態度を横断的に検討し、妊娠期の生と死に対する態度に影響を与える要因を明らかにすることも試みた。その結果、「生への執着」は、妊娠初期に比べ中期に高まり、その高さは後期にわたり維持されることが明らかになった。加えて、妊娠期女性の持つ生と死に対する態度には、胎動経験が影響を与えていることが示された。これらの結果に関して、妊娠中期の胎動が胎児の生命を実感させる経験であるという観点から考察を行った。

第Ⅲ部では、総括を行った。第10章では、研究1～6の知見をまとめ、今日の発達心理学に本論文が貢献できる知見を整理した。まず、成人期の生と死に対する態度の特質に関する結果をまとめ、成人期の生と死に対する態度は死の側面とともに生の側面、生と死の両面を含んだ構成であること、婚姻状況の違いや子どもの有無の違いによる影響は、その他の個人的背景要因の違いによる影響とは異なることを指摘した。次に、妊娠期の生と死に対する態度の特質を検討した研究から、妊娠経験が生と死に対する態度に影響を与え、妊娠期の生と死に対する態度の特異な様相は出産後も2年にわたり維持されることを示した。加えて、妊娠期の生と死に対する態度の重要な影響因である胎動についてやなぜ出産後2年にわたり特徴的な様相が維持されるのかについて議論を行った。さらに、育児期の生と死に対する態度を検討した研究から、

(氏名 田中 美帆 , No.2 )

妊娠、出産が生と死に対する態度に及ぼす影響について考察した。育児期の生と死に対する態度の特質には生の志向に関する個人的背景要因が影響を与えており、その影響は死別経験等の死に関連する個人的背景要因による影響よりも強いことを指摘した。また、成人期においては妊娠や出産の経験も死のイメージ形成に大きな役割を果たしていることを示した。最後に、成人期の生と死に対する態度における関係性の視点について検討し、その発達的変容についてモデルを提案した。成人期に重視される他者との関係性の観点から生と死を捉え、これまで同一のものと見なされてきた「生への執着」と「死への不安・恐怖」を弁別する必要性を示した。さらに、成人期は生きることへの志向が高まるため生と死に対する態度を捉える必要がないのではなく、生への志向が高まるライフイベントを基にして他者との関係性から死を捉えるという生と死に対する態度を有することを指摘し、前妊娠期から育児期にわたる「生への執着」と「死への不安・恐怖」の変容モデルを提案した。

第11章では、本論文の限界と今後の課題について述べた。本論文の限界として、尺度の妥当性や調査協力者数に関する問題点を指摘し、今後の研究デザインについて提案を行った。また、今後の展開として、妊娠期から育児期にわたる縦断的検討や質的データの収集、出産後の生と死に対する態度の変容について検討する余地が残されているという課題を整理した。